



兵庫県立大学・JICA連携プログラム

アルゼンチン野球振興支援ボランティア 参加者募集(日系社会青年ボランティア)

プログラムの目的と内容

①目的

本プログラムは、国際協力機構（JICA）が行うボランティア事業（日系社会青年ボランティア）に大学の知見・人材を有効に活用することにより、アルゼンチン共和国における野球の普及・振興を図るとともに、大学の国際協力分野における人材育成に資することを目的としています。

②具体的なプログラム

日系人が居住する地域を巡回し、日系の子ども達（主に日系3世、4世）、日亜学院等への野球指導を行います。練習の披露、現地の日系人との親善ゲーム等、アルゼンチン兵庫県人会ほか諸団体との交流等。

③派遣人数（定員）

15名前後（JICAによる書類審査と面接審査を経て決定されます）。

④派遣期間（日程は確定していませんが、期間は30日以内）

2017年2月20日前後出国～3月19日前後帰国の予定。

⑤費用

個人負担は基本的にありません。国内での研修や派遣往復に伴う国内旅費、海外旅費、現地での旅費、滞在費、パスポート等の出国に関わる諸費用等はJICAが負担します。また派遣期間中は日当（3,000円前後。目安）が支給されます。



応募要件

①20歳以上（2016年11月15日時点）

②現在、本学の硬式野球部、もしくは準硬式野球部に所属している者。もしくは高校での硬式野球経験が2年以上ある者

③TOEIC330点以上、英検3級以上、GTEC300点以上（その他の資格を持つ者に対しては要相談）
※英語能力については8/31迄に証明書（GTEC, TOEIC, 英検等）が準備できれば可。

④11月28日から30日に東京で開催される研修に参加できる者

⑤日本国籍を有していること

学内募集締め切り 2016年8月8日(月)

申し込み先

〒670-0092 兵庫県姫路市新在家本町1-1-12

兵庫県立大学環境人間学部健康教育学研究室

内田勇人まで。email: uchida@shse.u-hyogo.ac.jp

参加希望者は、メールにて下記情報（①氏名、②学部・学科・学籍番号、③生年月日、④所属クラブ、もしくは野球経験の詳細、⑤英語能力（TOEICの点数等））を添えて、申し込んで下さい。不明な点があれば、内田までメールにて気軽に問い合わせして下さい。



日系社会青年ボランティアとは ※JICAホームページより

今、海外には、北・中南米の国々を中心に260万人以上もの日系人が生活しています。日系人とは、すでに海外に移住しそこに根を下ろした移住者とその子孫の総称です。

彼らは、日本とは異なる風土や社会の中で営々と新生活の確立に励んだ結果、自らの生活水準を著しく引き上げたばかりでなく、周辺地域社会の発展と活性化という大きな波及効果をもたらしています。また、日本のイメージを形成する役割をも果たしているといっても過言ではありません。

これら日系人及び日系人社会が今後一層の充実と発展に向けて努力を重ねることは、結果的にはその在住国の発展に貢献し、日本にとっても望ましい状況につながることから、日本政府としても可能な限り彼らを支援することが望ましいと考えられています。

日系社会青年ボランティア事業は、1996年（平成8年）に設立されて以来、中南米の9カ国に対して、1,145名（2013年（平成25年）12月31日現在）の青年を派遣し、日系人社会及び周辺地域の発展に向け、積極的な活動を行っています。

JICA 報告 2014年3月20日

立塚秀知（日系社会青年ボランティア、福岡県出身）

日本野球の美しさー中南米日系人国際スポーツ大会を通してー

「ボリビアで開催される『中南米日系人国際スポーツ大会』に、アルゼンチンの日系人野球代表チーム（19歳以下）のコーチとして参加してくれないか」。そんな要請が来たのは着任して4か月がたったころでした。

「中南米日系人国際スポーツ大会（Confraternidad Deportiva Internacional Nikkei）」は、2年に1度、中南米で行われる日系人だけが参加する国際大会です。中南米日系団体の友好を深め、日系人としての誇りと尊敬し合う気持ちを堅固にすることを目的としています。46年の歴史を誇り、21回目の今年、ボリビアの第二の都市サンタ・クルス・デ・ラ・シエラで、1月29日から2月2日にかけて開催されました。9カ国が参加し、「日系人」という共通点のもと、国籍やスポーツの垣根を越えて交流しました。

日本から見て地球の反対側にある南米での大会で、「日本野球の美しさ」を見ました。私が思う「日本野球の美しさ」とは、チームワークに重きを置き、仲間と共に戦い、喜びや悔しさも全員で感じることです。ボリビアとパラグアイの2チームの「声」の中に、「日本野球の美しさ」がありました。その声は日本語でした。アルゼンチンの日系選手たちも日本語を話します。でも試合中や練習中に使うのはスペイン語なのです。

ボリビアとパラグアイは、日本語でプレーしていました。「打たせていこうぜ」「打たせるから頼むぞ」「仲間を信じて投げろ」という声が、グラウンドから、ベンチから聞こえてくるのです。アウト一つ、ヒット1本で喜び、1点を取って盛り上がる選手たち。どんな状況でも仲間に声をかけ、それに応える選手たち。実に楽しそうに仲間を信じて投げて打って走っています。

「ボールを送るスポーツはあっても、『人』を送るスポーツは野球だけ」。そう教えてくれた恩師がいました。だからこそ、人と人とのつながりが大切なのです。仲間を信じ、全員のチームワークで戦う姿勢、これこそが「日本野球の美しさ」であると改めて感じることができました。

「美しい」野球を目指して、たとえ言葉はスペイン語であっても、励まし合いや喜び合いであふれるチームをつくり、今後のアルゼンチン野球を背負って立つ子どもたちと野球を楽しんでいきたいと思えます。

